

平城宮跡と平城京跡の発掘調査

平城宮跡発掘調査部

平城宮跡発掘調査部では、1974年度には第1表に示した調査をおこなった。宮内の調査のうち、第78次北は推定第2次内裏の後宮東北部にあたり、この調査をもって第2次内裏地区東半部の調査をほぼ完了したことになる。第81次中は前年度にひき続き、通称一条通り沿いの民家移転後の整備に伴う調査で大膳職地区の調査もほぼ終了したといえる。第88次調査として一括したものの中には(1)平城宮周辺および法華寺旧境内での民家の改築などに伴う小規模な現状変更の調査、(2)平城京内における住宅建築の事前調査を含んでいる。今年度とくに特徴的だったのは大規模な事前調査が集中したことであった。前年度から続いていた奈良市庁舎建設予定地(第86次)、県警柏木予定地(第90次)、当研究所埋蔵文化財センター宿舎予定地(第89次)、県

第1表 1974年度発掘調査状況

営住宅建設予定地(第93次)などにみられる大規模な公共施設建築の事前調査が多く、平城京遺跡の保存問題ともあわせて考えていく必要のある問題であろう。また、今年度は薬師寺・大安寺などの大寺の現・旧境内での現状変更の結果に注目すべきものがあった。

以下ではこれらを2部にわけ(1)平城宮跡(第78次北・81次中・91, 92次)と平城宮東・西面大垣に関する新知見、(2)平城京内(第86次, 89次, 90次, 93次)遺跡、薬師寺、大安寺などの各遺跡について概要を報告する。

(1) 平城宮跡およびその周辺の発掘調査

推定第2次内裏後宮(第78次北) 調査地区は推定第2次内裏内部の東北隅にあたり、西は第36次、南は第78次南調査地区に続く東西60m、南北33mの範囲について行なった。今回の調査によって内裏地区の中央部から東半部にかけて6割余の調査を終えたことになり、遺構の変遷や性格について総合的な判断が可能になってきた。そこで、当研究所では第78次北地区の調査を実施したのち、昭和50年1月9日に第1回内裏検討会を催し遺構の変遷を中心とする検討を行なった。

以下は第78次北地区の調査結果を中心とし、併せて内裏地区全体の変遷について、内裏検討会の報告をもとにして略記する。

第78次北検出の主な遺構は掘立柱建物19棟、築地回廊1条、掘立柱柵列9条、溝6条などである。当地区では遺構の重複関係で6期のものに区分することができるが、内裏地区全体の時期区分にしたがってA～E期の5大期に、B期をB₁、B₂期に、D期をD₁～D₂期に小区分する。

A期 第78次調査検出遺構はS A 6905, S B 4775・8010である。S B 4775とS B 8010はともに10間×3間で20尺の間隔を置いて東西に並び第78次南検出のS B 7882とS B 8010は内妻を揃えて23尺間隔で南北に並列する。これら3棟はS B 4775を北庇、他の2棟を南庇とするほか、いずれも規模等しく、内部を4室に間仕切る方法も同じである。S B 8010の東約13尺隔てて南北柵列S A 6905を4間分確認した。この柵列はA期内裏の東面を区画するもので、北面柵S A 486、南面柵S A 655とともに一辺600尺の正方形区画を形成する。この区画の中央に正殿S B 4700を据え、附属棟として前記3棟のほか、北辺にS B 062・069・4837があり、いずれも桁行の長い東西棟で、正殿の背後に集中させている。

B₁期 第78次北検出遺構はS B 4780・4783・4825・7873・8000・8004, S A 8009・8011・8045, S D 7870・7863である。

S B 4780とS B 4783の2棟は10尺間隔で並列する10間×2間の東西棟建物で前者は4室

第1図 S D 7870略渠(西から)

後者は2室に間仕切る。両建物の間隔が狭いため屋根は双堂形式と推定される。S B 4780の北50尺隔てて建つS B 4825はS B 4780と両側面を揃え、両建物の東端を柵S A 8045で繋ぐ。S B 4825とこの西に並列するS B 4835は第36次調査で、それぞれ単廊、柵列と考えられてきたが、昭和29年調査で後期の北面築地回廊南側溝下に検出された柱穴を北側面とする建物と推定した。これら4棟は後宮北方ブロックを形成する殿舎群で、この東に南北230尺、東西170尺の内裏東北隅を画するブロックがある。この中央北寄りに9間×4間の4面庇東西棟建物S B 8000を置き、西南隅に同じ規模をもつ2面庇南北棟建物S B 7873の東側面をS B 8000の西側面と柱筋を揃えて建てる。このブロックの西端に接して北上し、中央で東に折れ内裏外に流出する暗渠S D 7870がある。この暗渠の東端では、S B 7873の南から東北方に斜行する暗渠S D 7863が合流している。この合流点のはちに西に4 m程移されるのであるが、その前にS B 8000を廃してその東南部に重複して南北棟建物S B 8004が建てられ、合流点を移した際にはS B 8004を壊してL字形の柵S A 8009・8011を設けている。したがって、次のB₂期に築地回廊を建てる以前にその下層にS B 8000と重複して2回の建替えが認められる。

B₁期の内裏を限る柵は東西ではA期のS A 6905を踏襲し、北面はS A 486を南に30尺、南面はS A 655を南に60尺移動させ、全体で東西600尺、南北630尺のやや南北に長い方形区画とする。この区画内に南北63間、東西59間の方眼地割を行なって建物の配置を決めている。一方眼目盛はしたがって南北10尺、東西10尺強となるが、各建物の柱配置はほぼこの方眼目盛に合せて殆どどの建物を10尺等間とする。

B₂期 第78次検出遺構はS C 156, S B 064, S A 8043, S D 7872・8010である。

この時期はB₁期内部の柵列S A 6905を中軸線として築地回廊S C 156に改める時期である。内部の建物はB₁期を踏襲するが、築地回廊にかかるS B 4825をS B 4780の北25尺の位置まで南にずらせ、新たに北庇を附け加えて、南面の縁を4間分に改めS B 064とする。S B 4780との

第2図 第78次北発掘調査遺構図

間は西端で3間、東端で2間に仕切る柵 S A 8043を設ける。前期の暗渠 S D 7863は築地回廊にかかるため西に移動して S D 7872となり、また、暗渠 S D 8010が S B 064の南面に沿って東進し、南東方向に折れて S D 7872に合流させる。S D 7872の西にある4間や2間の東西棟 S B 8008は時期不明であるが S B 7873の北側面と柱筋が揃うためこの時期の増築とみた。

B₂期 第78次北地区でB₁期にかかる造営はないが、後宮および後宮北方ブロックに増改築を行なっている。すなわち、後宮ブロックで正殿4703の西庇を拡げて12尺とし、その前方に前殿 S B 4645を、後殿 S B 4710との間に小建物 S B 4774を増築し、さらに、後殿の東西両端間を拡げるなどの改造を行なう。北方ブロックでは新たに S B 4800を増築して、これに伴ない排水路の変更を行なっている。

C期 第78次北検出遺構は S B 4822, S A 8033である。B₁期建立の S B 4780・4783は撤去され、替りに7間×4間、4面庇建物 S B 4822の1棟にまとめられ、東北ブロックとの境界には後宮の東を画す柵を延長して S B 064の東南隅にとりつく柵 S A 8033が設けられる。また、東北ブロックの S B 7873はその柱抜き穴からⅡ期に層する土器が出土することから、C期には廃されたようで、このブロックには建物が一棟も存在しなくなる。但し、暗渠 S D 7870・7872・8010は、やはり出土遺物の関係でC期にはなお存在することが明らかとなった。この時期には内裏正殿は同位置で形式が改められ、後宮正殿 S B 4704は内裏中軸線よりずれて東北方に移動し、これに伴い、後宮後殿を廃して、小建物 S B 4713を正殿の北に接して建てる。

D₁期 第78次検出遺構は S B 063・8005・8007, S A 4761である。B₂期造営にかかる S B 064, S D 8010は廃され、S B 064よりやや北にずれて12間×3間、南庇付東西棟建物 S B 063に改められる。S B 8005は7間×1間の南北棟で S D 7872と重複して同時に存在したと考えられる。この建物の北と南で鍵形に折れる柵 S A 8006, S A 7885により、それぞれ S B 8007・7870 B と

第3図 推定第2次内裏変遷図

繋がっているが、これらの柵と建物は臨時の施設である可能性が強い。D₁期の造営は内裏中央部の大規模な改変を行なっている。即ち、B・C期にわたる内裏正殿一郭の回廊を廃して縮小し、脇殿4棟のうち南の2棟を残して、内裏正殿を南方に移し、両脇殿の北側面と正殿南面の柱筋を揃えた位置に建て、これら3棟を囲む柵で区画する。後宮ブロックは逆に拡大して、柵で仕切られた長方形区画の中に後宮正殿、前殿を中心に対称性の強い殿舎配置を示す。

D₂期 第78次北検出遺構はS B 4878・8020・8030・7881, S A 8044である。前期造営のS B

柱穴、規模ともに小さく、B期以後の造営工事にかかわる作業小屋の可能性はある。

B期 A期の柵S A8165から北の内裏外郭内部に盛土して水平に整地した結果、内裏西外郭は西南隅で高さ約1mの土壇を形成する。この土壇の縁に沿って桁行10尺等間、梁行8尺の単廊S C8168を設けて第2期の内裏外郭を区画する。南面単廊はC期の門S B8160の基壇下に2間分検出したが、一部未検出分を除いて後世の削平により消失している。同様の状況は第35次調査にかかる東外郭においてもみられ、東外郭南面門下層に検出された2間×1間分の柱穴は東面廊S C705から数えて10尺等間で14・15間目に相当する位置にある。

内裏外郭の東面廊S C705と西面廊S C8168はそれぞれ内裏中軸線から500尺、450尺の位置にあり、西外郭は東外郭より50尺狭くなっている。

C期 B期の単廊がほぼ同位置で築地塼S A8170に造りかえられ、南面に門S B8160を開き、内裏外郭内部に大規模な礎石建物S B8150が建てられ、外郭の最も整備した時期である。S A8170は基底幅7尺、10尺等間の寄柱の礎石痕跡をもつ築地塼である。南面築地塼は前期の単廊より約1m南にずれて、内側の寄柱痕跡は土壇上に、外側は土壇下に検出した。西面築地寄柱痕跡は前期単廊の内側柱間の中間に3箇所確認されたのみである。

S B8160は北側面のみ残存し、棟通りと南側面の柱列は後世の削平により痕跡をとどめない。柱間寸法は桁行中央間13尺、脇間10尺で、梁行は築地塼との関係で13尺2間と推定できる。この門は東外郭南門S B7505と内裏中軸線に対して対称の位置にある。

S B8150は7間×4間、総柱の南北棟礎石建物で、南5間分を検出した。柱間寸法は桁行13尺、梁行11.5尺である。東側の桁行中央間には9尺間隔で10尺の出をもつ階段の凝灰岩製鋸桁受けがあり、この建物は10尺前後の床高をもつ高床建築で木製階段が東西中央間にとりついていた状況を示している。基壇の残存状態は良くないが7尺の出をもつ凝灰岩製壇上積基壇と推定される。基壇縁辺部と建物内部の各柱間通り中央には足場用掘立柱穴を伴っている。この建物は東外郭のS B7500と同規模、同形式で、南門と同様に内裏中軸線に対称の位置にある。

南門の西南方に近接して基壇状遺構S X8180がある。内裏西外郭の南側は東に高い緩斜面のためS X8180の西面から南面にかけて低い土壇状となり、西面には凝灰岩製側溝が一部残存する。東面では旧位置より乱れて石敷列があり、土壇状の規模は東西30尺、南北45尺程と推定される。この内部の西面から約7尺内側に延石風の凝灰岩製石敷列があり、また、南面にも東西方向の凝灰岩が1個体残されている。これを建物の地覆石とすればS X8180内に3間×2間の南北棟礎石建物の存在が想定される。

南門の西、築地塼の北に接して溝S D8163に囲まれた基壇状遺構S X8175がある。規模は東西約14m、南北約5mの東西に細長い凝灰岩製基壇と推定される。溝S D8163は南門の北雨落溝を切っていることから、この基壇は後の増築と考えられる。なお、S B8150の東側面に接する4間×1間の南北棟掘立柱建物S B8155もS B8150に付随した増築と認められる。

遺物 発掘区西南部の整地土下より200点を越える木簡が出土し(別項報告)、平城宮造営に

関する新たな知見を得た。また、瓦や土器類をはじめ、多量の遺物が出土した。瓦類は軒瓦約900点のうち6225・6308・6663・6664形式など第2次内裏、朝堂院所用瓦が約70%を占める。土器類は土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器が少量のほか、円面硯と蹄脚硯が各2個体出土した。その他の遺物では櫛、曲物、箱側板などの木製品と銅製帯金具がある。

以上の各時期の年代については、A期の整地工事が出土木簡より平城宮造営当初まで遡り、これに続く内裏外郭内の第2期整地土中より平城宮Ⅱ期の土器、軒丸瓦が出土したことからB期造営の年代を神亀年間に比定できる。C期についてはB期を余り下らない天平年間に置くのが妥当と思われる。

宮西方官衙の調査（第92次） 調査地区は佐紀池西南端の堤に接する小字「池尻」にあり、152㎡の範囲について行なった。調査地の東に接して推定第一次内裏地区の西を限る高さ1m余りの土壇があり、西は佐紀池を含む南北に延びる谷状の低地となる。本調査は平城宮跡の整備にともなう浄化水溝設置のための事前調査として実施した。

調査の結果、池、溝2条、堰状遺構などを検出し、大きく2時期に区分できる。

A期 発掘区の下部分が池状の低地となり、南西と東南側が高く、北に向って地山が下降する。中央部を幅2～3m、深さ0.8mの南北溝S D8195が南流するが、発掘区南端では溝肩が明瞭でなくなる。この溝および低地部分には木屑を多量に含む暗褐色土層が30～40cm程厚く堆積し、和銅6年の年紀のある木簡が出土した。

S D8195は当調査地の南約110mで実施した第28次調査の南北溝S D3825につながり、推定第1次内裏・朝堂地区の西に接して宮域を南北に縦断するものと推定される。

B期 発掘区の西南部に約1mの盛土を行ない、S D8195を埋めため、池S G8190をつくる。池岸が袋状にいりくんだ部分に排水溝S D8198が設けられ、南方の第28次調査地区ではA期の南北溝を東に拡幅したかたちで遺存している。池と排水溝の接続部の兩岸にS X8192とこれにともなうS A8191、S X8194があり、S X8192は後に北側に寄せて柵S A8193に変えられる。堰の施設かともみられるが確証はない。

出土遺物は土器類のほか軒丸瓦6284型式20点、木簡38点、木製品（曲物・櫛・ヘラ）がある。これらのうち、軒瓦6284型式16点と木簡、木製品はいずれも暗褐色粘土層から出土したものである。木簡は前述の「和銅六年」銘を有する越前国能登郡の庸米、伊勢国三重郡からの黒鯛の貢進札のほか、貢進物は不明であるが、越前・美作・播磨の諸国名がみられる。

東面・西面大垣 第88次調査のうち、平城宮の東西の大垣地区にかかる現状変更が数件あった。いずれも家屋の改築による事前調査のため、小範囲の発掘調査しか望めず、かつ後世の掘乱もいちじるしかった。しかし、その中でも大垣の状況を若干把握できたものがあって、その概要を報告する。

東面大垣 いずれも東院の東面大垣地区であり、第88—3・12次では坊間大路の西側溝の一部を検出した。溝は全幅を明らかにすることはできなかったが、東院東南隅地域の発掘調査（第44次）の所見から判断したものである。第88—2・3次では築地本体の検出はできなかったが大垣基壇と西雨落溝を2箇所で見出している。また第88—16次では、大垣基壇が地山を削り出しているものであることが明らかとなった。そしてこの上に約30cmの積土を残していた。

西面大垣 第88—1次では西面大垣基壇および西の雨落溝を検出した。基壇は幅約6mで、南北にのびるが、地山上に約40cmの積土をとどめていた。第88—13次でも大垣基壇の地固めのための整地土を検出した。いずれの地区でも築地本体は検出できなかった。第88—19次では発掘範囲の関係から大垣に及ぶことはできなかった。

平城京跡の発掘調査

左京3条2坊の調査（第86次） 本調査は奈良市庁舎建設に伴う事前調査である。新市庁舎は奈良市北新町の旧三笠中学校跡地に計画された。このうち敷地の西半部については、昭和48年度に第83次調査として発掘調査を実施し、10坪と15坪を区画する南北小路をはじめ多数の遺構を検出した。昭和49年度は第86次調査として、敷地の東半部・左京3条2坊15坪の中心部について発掘調査を実施し、古墳時代、奈良時代、平安時代、中世以降の遺構を検出した。

なお、第83次・第86次の調査結果は『平城京左京三条二坊』—奈良国立文化財研究所学報第25冊、1975年10月—として報告書を刊行しているので、ここでは簡単にその概要をのべる。

古墳時代の遺構 溝二条を検出。調査区の南東部に検出した溝は、西流して幅3～7.5m・深さ1.2mを測る。堆積土中から、5世紀末ないし6世紀初頭とみられる土師器と木製品を多数採集した。

奈良時代・平安時代の遺構 昨年度の検出分を含めて、15坪の主な遺構には掘立柱建物31棟、掘立柱塼30条、溝7条、築地1条、道路1条、井戸6基がある。これらは大きくA・B・C・Dの4期に区分でき、さらにA期は3期に、B期は2期に細分できる。この時期区分に実年代を比定すると、A₁期の廃絶期は神亀から天平初年頃（730年前後）、A₂期の廃絶期は天平末年頃（745年前後）、A₃期の存続期は750年を中心とする頃、B期の廃絶期は780年頃、C期の廃絶期は8世紀末から9世紀初頭、D期の廃絶期は9世紀中頃となる。

A期の建物は東西の2群にわけられ、各群は基本的に3棟で構成される。すなわち、大規模な東西棟の主屋を中心にして、その南北に1棟ずつ東西棟の副屋を配置する。また両群の東西中軸線は、坪の中央から各々85尺に振りわけられた線上にある。さらに両主屋は心をそろえて東西に並ぶように配置されている。B期の建物も2群に分けることができる。各群の主屋を東

第7図 左京3条2坊15坪遺構配置図

第3表 15坪主要建物一覧

西に並べる原則はA期から踏襲されているが、建物群の中で、中軸線上に副屋を配置する原則はみられない。C期はA・B期と全く異なった建物配置を行なう。坪は南北の掘立柱塀で中央から東西に二分され、建物6棟は東半に配置されるが、小規模のことが多い。D期の建物も坪の東に配置されるが、C期の配置とは異なる。A期のように2棟の主屋を東西にならべるのではなく、主屋と思われる広廂の東西棟に中心線をそろえて南と北に配置している。

15坪は細分されずに坪ごと1戸に班給された家地とみなすべきであり、2坊大路に接し平城宮の東南約500mという占地・建物の規模からすれば、相当高位の居住者を想定することができる。A・B期では主屋と副屋が東西に2組配置され、井戸、雑舎を共有する2家族の居住が予測されており、戸主に代表される1戸内での家族構成、家族の居住のあり方を具体的につかむてがかりをえた。

063は規模縮小して6間×3間、東西棟2面庇建物S B4878に建替え、この東に、後宮ブロックの東を限る柵を延長して北面築地回廊と結ぶS A8044を設ける。東北ブロックはこの柵と第78次南検出の東西柵S A7891とによってB期よりやや狭い方形の区画をつくり、この中にS B8020とS B7881を24尺隔てて南北に並列させる。前期まで存在した斜行暗渠S D7873は廃されるが、東西暗渠S D7872はS B7881の北底下に存続する。S B8020・7881の2棟はその後撤去されてS B8030の1棟のみとなる。その他の殿舎は一部の建物に改築がみられるだけで、D₁期の殿舎配置をそのまま踏襲している。

以上は内裏の存続した奈良時代の遺構変遷のあらましで、図示すると左図のようになるが、長岡京遷都以後、平安時代末まで数次にわたる小規模建物が約40棟程検出しており、第78次北地区でもこの時期のものがS B8003・8045の2棟存在する。

遺物 第78次北出土遺物は主として暗渠S D7870・7872・8010から多数の瓦、土器が出土した。瓦類では軒丸瓦が27型式165個体、軒平瓦が23型式184個体出土した。軒丸瓦と軒平瓦のセット関係で最も多いのは6313型式と6685型式の組合せて、次いで6311型式・6664型式、6225型式・6663型式が多く、いずれも神亀年間を中心とした時期の瓦である。その他和銅年間に遡る6664—C型式や時期の新しい瓦もあるが全般に古い時期のものが集中しているといえる。

以上、内裏地区の造営時期を主として遺構の重複関係で区分してきたが、それぞれの造営年代についてはB期の上限が瓦、土器の形式より神亀年間であることがほぼ確定したほか、現在個々の建物出土の遺物との関連で検討中である。また、遺物との関連で上記の内裏の建物遺構変遷についても若干修正される可能性も含んでいる。

大膳職地区の調査 (第81次中) 調査地は推定宮内省大膳職の西地区東南隅にあたり、第4次調査地区の南に接した東地域約680㎡について行なったものである。

遺構は発掘区東北部で掘立柱建物5棟と礎敷溝1条が重複し、その南に発掘区中央を東西に分断する築地塀と側溝を検出した。

礎敷溝S D130は推定第1次内裏地区を囲う築地回廊の北面回廊南雨落溝と推定され、この築地回廊以前には桁行9間、梁行2間、10尺等間の南北棟建物S B167とその南側柱に重なる小建物S B8117とがある。北面築地回廊はのちに南方の現二条通り道路下に移し、それに伴って、この地区には新たに築地塀S A109を設けて大膳職南面を区画している。この区画内に、S B8116とS B166とが前後して建てられる。S B8116は桁行5間、梁行2間の東

第4図 第81次中発掘調査遺構図

西棟建物で、柱間寸法は桁行9尺、梁行10尺である。SB166はSB8116と同規模の身舎に9尺の出をもつ南庇をとりつけた平面形式で、SB8116より新しいと考えられるが、前後関係についてはなお検討を要する。

SA109の下層整地土中に軒瓦6732A・6691A・6272型式を、築地基底部に6282B型式を出土していることから、築地塀SA109の造営は天平末期から勝宝年間頃と推定される。築地下層の瓦出土地点は丁度第2・4次調査にかかるSG149西南延長部にあたり、平城宮創建時とされてきたSG149の埋立ては当調査地区に関する限りではかなり遅れることになるけれども、前記軒瓦を伴う土壌がSG149と重複している可能性もあるので、SG149の埋立て時期については再確認する必要がある。

第2次内裏西外郭の調査(第91次) 調査地は、推定第2次内裏外郭の西南隅を含む南北58m、東西40mの範囲で第41次調査の西に続く地域である。調査面積は発掘区の西北部から南東部にかけて斜行する幅約8mの道路敷を除く約3800㎡について行なった。

現状の地形は内裏外郭西南隅の築地痕跡と考えられる畦畔が発掘区西端から発掘区中央南寄りて直角に折れて東に向い、この畦畔を境にして内側は外側より約1m高い土壇状を呈している。遺構面は旧水田面下約40cmで検出した。

検出した主な遺構は礎石建物1棟、掘立柱建物6棟、掘立柱単廊1条、築地塀1条、門1棟、掘立柱柵2条、基壇状遺構2基などである。これらの遺構を整地層位と重複関係により次の3期に分類した。

A期 第1期整地工事を行ない、内裏外郭の柵SA8165を設け、その南に掘立柱小建物群SB5495・8181・8182・8183・8184を造営する時期である。旧地形は推定第2次内裏、朝堂院地区が営まれた丘陵の西斜面にあたるため、発掘区の東端は西端より約1m、北端は南端より約1m高くなっている。したがって、整地工事は旧地表の高低差を少なくするために西側の谷の部分に約50cmの盛土を行ない、全体をなだらかな緩斜面にしている。SA8165は内裏西外郭の南面を画する第1期の柵で10尺等間、12間分検出した。この柵の西端で北に折れることが予想されたが、一部試掘の結果10尺等間の位置には検出されなかった。

発掘区の西南部に集中して存在する掘立柱建物群は、いずれも第1期整地面上にあるが

第5図 第91次発掘調査遺構図

左京2条2坊14坪の調査 (第89次) 本調査は、当研究所埋蔵文化財センター宿舎建設に伴う事前調査である。調査地は、左京2条2坊14坪にあたり、東側は、推定東2坊大路と境を接している。調査は2坊大路東側溝の位置と、坪境における遺構の状態を確認することを目的とし、予定地中央を南北に貫く長さ約60mのトレンチと、その両側に長さ約10m、幅約6mの東西トレンチを北、中央、南の3個所に設定した。

遺構は、層位や伴出遺物によって奈良時代中葉から平安時代初期（A～C期）およびそれ以降に分けることができる。奈良・平安期の遺構は、建物8棟、柵8列、溝5条、井戸1基、土壇10基等がある。なお、当初の目的のひとつであった東2坊大路側溝は確認できず、今回の調査の範囲外であることが明らかとなった。

A期 南北に連なるSK017・018・019・022の土壇があり、後に大量の土器、瓦とともに整地してSB002・003・08、SA004などを作る。

B期 SB002・003を廃し、大きな柱掘形のSB001は規模は不明だが、梁行2間、桁行4間分を検出した。第8図 左京2条2坊14坪遺構配置図 各柱間は8尺等間である。SA009は3間の南北柵だが、SB001の目隠し塀とすれば、SB001は身舎のみの建物となろう。SB001の柱抜き取り穴からは多量の奈良末の土器とともに二彩・三彩の瓦片が出土した。

C期 SB005・006・007、SA010・011・015、SE026、SK021・024が層位などからこの期に分類できる。これらはさらに細分できるが、全体の配置は不詳である。SE026は直径約60cmの曲物を井戸枠としたもので、埋土から平安初期の土席器が出土した。SK024は新しい時期の土壇で、内部からは多量の炭化物、鋳滓片、るつぼなど鍛冶関係の遺物が出土した。これと関連するものに、発掘区の南側、SK06付近の上層で検出した10数条の溝があり、埋土の状態は同じであった。この付近でたたら作業を行なったことを示すものであろう。

平安以降、内部に少量の瓦器を伴った溝が数条ある。農耕に関連したものと考えられるからこの頃には大半が水田化していたものであろう。

今回の調査は発掘面積が少なく、坪内部の遺構状況は確認し得なかった。しかし左京3条2坊の調査で(第86次)確認した東2坊大路西側溝の座標から計算すると、奈良時代は主要な建物は坪境に接することなく、少なくとも大路側溝から7・8丈余（21～24m）の空閑地があり、その間には目隠し塀や井戸等住宅に付随する施設があったと推定される。

左京5条1坊の調査（第90次） 本調査は奈良県警柏木基地の建設に伴う事前調査である。調査地は奈良市柏木町長塚に所在し、左京5条1坊4坪・5坪にあたる。4坪は昭和48年12月に行なった第85次調査区の東に接している。調査区全城から多数の遺構を検出したので、坪ごとにその概要を述べる。

4坪の遺構 検出した奈良時代の主な遺構には、掘立柱建物15棟、掘立柱塀3条、井戸4基溝2条、土壇3基があり、大きく3期に区分できる。

A期 宅地は素掘りの溝SD908で南北に区分される。南の区画では、南に廂をもつ東西棟SB1073が中心建物となり、その東にSB1102、西にSB1080、南西にSB1075が配置される。SB1102は中心建物SB1073の身舎部分と同規模で、棟を東西の一線上にならべている。この時期の井戸にはSE1093があるが、井戸枠などは残っておらず、出土遺物も少ない。

B期 宅地を区画する施設は、溝から掘立柱塀SA1082に変わる。中心建物はSB1071で、A期の中心建物の位置よりも南に移り、桁行も1間拡張されて6間となる。中心建物SB1071の東に南北棟SB1100、北東にSB1103、北西にはSB1077が配置される。SB1100の南妻はSB1071の南側柱列にそろえられ、両建物間には掘立柱塀SA1091が設けられる。井戸には新しく掘られたものではなく、A期のSE1093がそのまま使用されたものと思われる。

C期 宅地を区画する施設については、SE1081の掘形がSA1082の線上を切って掘られていることから、この時期には取り払われているようである。中心建物は東西棟SB1072で、その東にSB1104、南東にSB1101、西にSB1076が配置される。中心建物SB1072はB期の中心建物より北に移り、A期の中心建物と一部重複する。SB1072の桁行は総長14mを測り、B期の中心建物SB1071と同規模であるが、SB1071が6間であるのに対して、SB1072では1間減らし5間とし、1間あたりの柱間寸法を長くとしている。また、東から2間目には間仕切り

西地区

東地区

第9図 左京5条1坊4・5坪遺構実測図

を設ける。井戸は新たに掘られたものに S E 1081 がある。井戸枠は曲物を三段に重ねたもので曲物の周囲に長い板を縦にならべて囲いとしている。遺構検出面からの深さ 2.2 m である。

S D 908・S A 1082 の北側の区画では全体の規模を知りうる建物を検出しておらず、時期区分も明らかでない。S A 1085 は S B 1087 に関連したものであろうか。井戸 S E 1095 は S E 1081 と同じ方法で作られており、C 期の可能性が強い。

5 坪の遺構 掘立柱建物 6 棟、掘立柱塀 2 条、井戸 1 基、土壇 4 基を検出した。建物には全体の規模を知りうるものはない。S B 1129 は東に廂をもつ S B 1130 より新しく、柱根を残している。井戸 S E 1122 は方形の掘形をし、厚さ 4 cm 前後の板を 5 段以上に重ねた井籠組みの井戸枠をもつ。東西 1.2 m・南北 1.7 m、遺構検出面からの深さ 1.5 m の規模で、堆積土中から少量の土器が出土した。なお 4 坪と 5 坪間の未調査部分は幅 30～35 cm が残っているが、南北小路部分にはすでに盛土がなされており、調査できなかった。

遺物 出土量は少なく、土器は S D 908 と S E 1081 からややまとまって出土した。墨書土器は 3 点あり、S E 1081 から出土した短頸壺（須恵器）の底部外面のものは「泉」と読める。ほかに硯片 3 点が出土した。瓦では軒瓦の出土は数点にすぎない。そのうち、S B 1071 の柱穴から軒丸瓦 6308 型式 1 点・S B 1077 の柱穴から軒丸瓦 6304 型式 1 点が出土した。各期の遺構から出土した遺物は、いずれも 8 世紀中葉以前のものであり、A・B・C 期の遺構は比較的短期間に造替を重ねたものと思われる。

今回の調査を通して、4 坪内にはきわめて計画的に建物を配置していることが明らかになった。5 条大路を側溝心々距離で 8 丈、4 坪の北と東の小路を溝心々幅 4 丈とすれば、宅地境界施設と思われる S D 908・S A 1082 は坪を南北に 4 等分した線上にある。また、各期の中心建物は南北に移動するが、その東西の中心線は変らず朱雀大路東側溝心から 45 m の位置にあたる。このように坪内を南北に 4 等分し、東西の 2 等分線上に東西棟の中心建物を配置したものと思われる。

左京 8 条 3 坊の調査（第 93 次） 本調査は奈良県住宅供給公社が、奈良市東 9 条町字姫寺に計画した西売間団地建設に伴う事前調査である。調査地は左京 8 条 3 坊 9・10・15・16 坪にあたり、10 坪は平城京の東市推定地（左京 8 条 3 坊 5・6・7・10・11・12 坪）6 坪分の東北部分を占める地域である。調査は 2 年度にわけて行ない、本年度分として、9・16 坪を中心に 10・15 坪の一部を調査し、昭和 50 年度に第 94 次調査として、10・15 坪の主要部を調査した。なお両次にわたる調査概報を「左京 8 条 3 坊」として昭和 51 年 3 月に刊行予定であり、ここでは第 93 次の調査についてのべる。

第 93 次調査で検出した遺構には弥生時代と奈良時代のものがある。

弥生時代の遺構 貯蔵穴 1 基、溝、小ピット群を検出した。貯蔵穴 S K 1200 は 9 坪の S E 1180 の南西で検出した。直径 1.5 m の円形プランをとり、断面形は U 字形、深さ 102 cm を測る。貯蔵穴内には木片など有機質を含む灰褐色土が堆積し、第 V 様式土器（壺、長頸壺、高杯、甕、鉢）

16点を採集した。溝は、幅20cmから4mのものまであり、規模は一定しない。各溝とも灰色砂が堆積し、その中から磨滅の著しい第Ⅴ様式の土器片が少量出土した。これらの溝は自然の流路の可能性が強い。

奈良時代の遺構 主な遺構に堀河、寺院、小路および道路状遺構、掘立柱建物、井戸がありここでは条坊遺構と各坪内の遺構にわけてその概要をのべる。

条坊遺構 堀河SD1300は9坪の中央を北から南に流れる状態で検出した。当初は素掘りで遺構検出面の幅約10m、深さ1.4mを測り、奈良時代後半には、杭と平板を組みあわせたシガラミ状の施設で護岸工事を行なっている。堀河の兩岸には築地、道路などの施設はなく、岸いっぱいまで、宅地として利用されていたものと推定される。遺物は土器が大半を占めるが、人面土器、土馬、人形、削りかけなどの祭祀的性格をもつものや铸造関係の遺物とともに鑄造しの和同開珎3点が出土した。出土土器では、奈良末のものに完形品が多く、それ以前のものは破片で検出される傾向にある。このことは堀河の清掃が定期的に行なわれていたことを示すとともに平城京の廃絶に伴って、堀河も廃絶したものと推定される。

小路SF1160は9坪と10坪を区画する東西小路で、南側溝SD1155と北側溝SD1156の側溝心々幅は約6m(2丈)である。SD1155は幅3.4m～3.8m、深さ1.2mを測り、西に流れる。西寄りには、10坪内に入る橋SX1157が設けられる。SD1155からは、奈良時代前半の土器に伴って木簡、木製品、金属製品、布片、紙片、皮革片など多数の遺物が出土した。木簡の中には「□東宮青奈 直□」と判読でき、市での買物のメモ的な意味にとれるものがある。市との関連を示す遺物と推定される。

北側溝SD1156は幅1.2m、深さ50cmで西流する。溝の東端は、9坪内の道路状遺構SX1174の西側溝SD1173と合流し、南北小路の西側溝SD1172とは合流しない。

小路 S F 1170 は 9 坪と 16 坪とを区画する南北小路である。東側溝 S D 1171 と西側溝 S D 1172 間との溝心々距離は約 6 m (2 丈) である。東側溝 S D 1171 は幅 1.0 ~ 3.2 m, 深さ 60 cm で溝の落差はみられない。溝の南端は幅 50 cm, 深さ 20 cm の規模になり, 東西小路を横断して, 南側溝 S D 1155 に流入する。西側溝 S D 1172 は幅約 1 m, 深さ 30 cm の規模をもち, 東側溝と同様に溝の落差はみられない。この溝の南端はいずれの溝ともつながらずに終わるが, その位置は,

S D1161の東延長上にある。

小路S F1331は10坪と15坪を区画する南北小路で、東側溝S D1330と西側溝S D1332を伴う。当初、東側溝は暗渠S D1166として西北に45度の方向で折れて、西側溝S D1332北端に合流し、東西小路南側溝に流入している。後に暗渠は廃され、S X1330として北進し、南側溝に流入する。西側溝S D1332は幅1.0～1.8m、深さ30cmで、東西小路の南側溝に流入する。

第11図 S X1165暗渠(東から)

小路S F1430は15坪と16坪を区画する東西小路で、調査地の東に設けた南北トレンチで検出した。南側溝S D1404は幅1.9m、深さ70cm、北側溝S D1405は幅90cm、深さ1.5mである。また、両側溝の心々距離は6m(2丈)である。

東西小路と南北小路の交差点では、東西小路の南側溝S D1155に木製暗渠S X1165が設けられる。東西の全長3.1m、幅1.2m、開口部の高さ約50cmである。暗渠の構造は、直径約15cm、長さ1.0～1.2cmの杭を溝の両側に5本ずつ相対して立て並べ、その外側に土留めの横板を重ねて側壁とする。杭の内側に10cm角の柄穴をあけて角材を差渡し、暗渠の天井板を受ける。天井板は幅10～15cmで9枚並べ、暗渠両端では天井梁より30cmせり出している。この天井板の上に、さらに60cm程盛土して暗渠を形成している。また、暗渠の西は約6mにわたって暗渠と同幅で護岸用側壁および杭が残存する。

暗渠の前身は幅約2.4mの素掘り溝で、暗渠西出口付近には溝底を横断して約2mの堰が残る。この堰の南端は斜行暗渠S X1166の出口と小路西側溝の合流点に設けられた堰板の東端とつながり、斜行暗渠S X1166と前身の素掘り溝が同時期であることを示している。これら2つの堰から西には、S X1166、S D1332・1334からの排水による溝壁の乱れを防ぐために、約2m幅の側板擁壁を設け、溝底にはバラスを敷きつめている。

暗渠S X1165の前身の溝には、暗渠と同位置に橋が掛けられており、ちょうど暗渠両端と揃えて北側の溝肩に2個の礎石が残され、橋桁を受けていたものと考えられる。

9・10坪内の遺構 各坪内の遺構のうち、15坪には寺院址と掘立柱塀がある。16坪では掘立柱建物7棟、掘立柱塀3条、溝1条、橋1基を検出した。いずれもトレンチ調査のため、その全貌を明らかにすることができなかったため、ここでは9・10坪の遺構について述べる。

9坪の遺構 坪の東南部にあたる東西37m、南北73mの範囲を調査し、掘立柱建物54棟、井戸4基、道路状遺構、地割り溝等を検出した。

道路状遺構 S X1174は南北小路と平行にあり、西には側溝S D1173を伴う。南北小路の西側

溝SD1172とSD1173の溝心々距離は小路幅と同じく6mである。SD1173は中央に開口部を設け南北に延びる溝で、南端は西に折れて東西小路の南側溝SD1156につながる。中央開口部には1間の門SX1129が建てられ、9坪の東の入口となる。SX1174の北端では、SX1174を遮る形でSX1287が作られるが、小路の西側溝SD1172との重複関係から、SX1287が新しい。SD1173の堆積土からは、SD1172、SD1171と同じように奈良時代の各期の土器が出土しており、小路側溝との前後関係は認められない。また、SX1174上に建物が作られないことからしても、SX1174は奈良時代を通じて道路状の空間地として利用されたものと考えられる。

南の道路状遺構は、東西小路の南側溝SD1156とその南の溝SD1161との中のSX1162が考えられる。規模はSX1174と同じであるが、この部分に建物や掘立柱塀が建てられていることや、幅60cm、深さ10cmのSD1161から出土する土器が奈良時代後半のものであることからすると、SX1161は奈良時代後半に敷地を狭めて設けられた可能性が強い。

9坪内の建物、井戸は宅地の地割溝で区画された区域に配置されている可能性が強い。すなわち、坪は堀河で東西に二分され、東の宅地内を東西に横切る小溝間の距離は、SD1310とSD1271間で30m、SD1271とSD1258間で15m、SD1258と東西の塀SA1175間で32mとなる。このことは、坪が東西に二分され、さらに東の部分は南北に100尺・1/8町、50尺・1/16町の宅地に区画されていると推定される。しかし、建物の中には、地割溝と重複しているものがあり、宅地幅の変更もあったものと思われる。

掘立柱建物54棟、井戸4基は5期に細分できる(第4表)。

A期では掘立柱建物10棟、井戸3基がある。建物・井戸は南北の二群があるが、井戸は坪の東によせられ、南北線をそろえて配置されている。南群は掘立柱塀SA1175と東西溝SD1258で区画された中に、建物4棟、井戸2基がある。建物では身舎2間5間で北に廂をもつSB1190が中心建物となる。井戸SE1180は一辺90cm、深さ1.8mの横板井籠組みのもので、奈良時代末まで使用されている。SE1195は一部を検出したが本体は未掘のためその詳細は不明である。

北群には建物5棟と井戸1基がある。建物5棟SB1242・1250・1251・1266・1267は中央を空地にしてその周囲に配置される。井戸SE1230は一辺90cm、深さ1.6mの方形の縦板組の井戸である。この井戸も何回かの清掃を行ないながら奈良時代末まで使用されている。

B期には建物12棟、井戸3基がある。次のC期とならび、地割溝による宅地割をつかめる時期で、 $4\frac{1}{8}$ 町または $4\frac{1}{6}$ 町で宅地に建物と井戸をセットにして配置している。坪の南ではSD1258を北の境とし、その南に中央部を空地にして建物4棟(SB1181・1197・1210・1222)を建て、井戸はSE1180をひき続き使用する。その北では、SD1258とSD1271間を50尺にとり、井戸SE1230と2棟の建物SB1244・1255が配置される。調査区の北ではSD1310とSD1271間を100尺にとり、建物6棟と井戸SE1260を配置する。井戸SE1260は南のSE1180とSE1230の線上に新たに掘られたもので、一辺約1m、深さ1.3mの方形掘形の底に曲物を据えている。建物6棟はSD1281で南北の3棟ずつに分離でき、この区域はさらに細分される可能性が強い。

C期には建物12棟がある。建物の配置等についてはB期を踏襲し、それほどの変化はない。

D期には建物8棟が南に集中する傾向がみられる。B・C期と異なって、中心建物とよべるような大規模な建物もなく、建物数も少なくなる。井戸SE1260は廃絶し南の道路状遺構SX1162はこの時期になって宅地を狭めて作られる。また、SB1252のように地割溝と重複するものがあり、宅地の変更があったものと推定される。

E期では建物8棟があるが、D期より散在する傾向がみられる。

9坪の調査を通して、小路と平行で同じ規模の道路状遺構の存在が明らかになった。また建物規模は桁行1間から6間までであるが3間程度の小規模な建物が大半を占める。9坪は市に関係した施設とも考えられるが先述の左京3条2坊15坪や5条1坊4坪の建物よりもさらに小規模であり、宅地割の問題を含めて、平城京内の宅地のあり方の多様さを示している。

10坪の遺構 道路状遺構1条、溝2条、掘立柱建物1基、井戸1基がある。10坪は東市推定地の東北部にあたるが、市の外周を区画する施設はみられない。道路状遺構SX1333は9坪のSX1174と連続するもので、坪の東に検出した。SX1333は西に側溝SD1334を伴い、SD1334と南北小路の西側溝SD1332との溝心々距離は6m(2丈)である。井戸SE1392は曲物を使用した井戸で一边1.1m、深さ50cmの方形の掘形の底に、さらに直径55cm、深さ55cmの円形の穴を掘り、そこに曲物を据えつけている。今回の調査で検出した建物は2間3間の東西棟SB1391のみであるが、第94次の調査ではこの南に多数の建物を検出した。

薬師寺西僧房地区の調査 今回の調査は伽藍の復原とその変遷を明らかにするとともに、境内整備計画の資料を得る目的で、寺の委嘱により当調査部が行なった。調査地域は西僧房跡を中心として、食堂西端、鐘楼、西回廊などを含む地域と現本坊の北方地域とである。以下順を追って述べる。

西僧房 薬師寺僧房については、薬師寺発掘調査団(团长杉山信三氏)による昭和45年夏の調査で東僧房を検出しており、僧房の位置、平面などが明らかになっている。今回の調査は食堂をはさんで対称の位置にある西僧房について行ない、大房、小子房の一部、両房の間にある付属屋及び石溝で画された空地を検出した。大房北側は中世の溝によってかなり破壊されていたが、大房は厚く焼土に覆われ保存は良好であった。

僧房基壇は径20cm程の玉石を一列に並べた低いものであり、大房、付属屋、小子房がともに同一基壇上に建設されている。基壇前面葛石の出は庇柱心より2.1mで、その南に接して幅約80cm、深さ約20cmの素掘りの雨落溝が

第12図 薬師寺出土軒瓦

設けられている。大房は食堂と棟心をそろえた東西棟であり、食堂西方にとりつく第一房から第七房までを検出した。食堂西側面と僧房東妻は心々で約7m離れる。大房一房は桁行2間・20尺(天平尺)、梁行4間・38尺であり、隣の房とは壁で仕切られる。各房は梁間20尺の身舎と前後各9尺の底部分からなり、大きく前、中、後の3室に分けられる。前室前面には凝灰岩の地覆が20尺の間を通り、当初は中間に柱がないが、後に正面をほぼ3等分(6.5尺・7尺・6.5尺)した位置に柱を立て中央を扉口に改造している。中室は20尺四方の広間で、正面は柱間3間とし中央間8尺を扉口、両脇間6尺は壁となり、背面は中央に柱を立て西方間は壁で、東方間は東端3尺を壁、残り7尺を後室への扉口としている。後室は東西二室に分けられる。西側は東面に扉口をもつ部屋となるが、東側は背面に壁の痕跡はなく、外方へ開放となっている。

房境や各室の境は瓦を重ね並べた地覆が敷かれている。この地覆には、両側に平瓦を立て、その間に平瓦を重ねたものと、さらにその上へのし積状に平瓦を重ねたところがある。また地覆上に厚さ約15cmの焼けた土壁が遺存している箇所もあった。中室内部には小形の凝灰岩切石や埴、野面石などをを用いた東石が整然と配置されており、これらをもとに各房を通じ、西方には床を設け、東壁際には柵を設けていた状況が復原できる。後室は瓦や砥石が置かれていたり、また第三・七房では床張りの痕跡があり、その使い方に差がみられる。大房の改修は前面凝灰岩地覆石以外にもみられ、土間のかさ上げや、礎石の上に石を重ねて柱根元の腐朽を修理したと思われる箇所があった。床・柵の東石である凝灰岩切石は、後には埴や野面石に置き換えられたところがある。前室も後に中央間同様床張りを行なうなど改修されたところがある。

大房の北側柱心から2.4m北には、各房ごとに西側柱筋を大房の房境にそろえた1間×3間の南北棟建物があり、その東側にL字形の玉石溝に画された中庭を検出した。これは各房とも同様に配されており、その建物は桁行24尺梁行8尺で、大房に見られるような瓦を重ねた地覆がある。内部には間仕切りがなされており、渡り廊ではなく部屋としての使用が考えられる。元興寺の「検損色帳」に見える中居に当たるものであろう。さらにこの部屋の北側柱心からmの位置に桁行2間20尺、梁行2間14尺を一房とする東西棟の小子房の存在を確認した。小子房背面には堰板を両側に立てた幅約40cmの雨落溝があり、この溝から大房正面葛石までは約30.5mとなる。西第三房では小子房建物の下に木樋が通り、中庭から北への排水施設と思われる。

『薬師寺縁起』によると、僧房は天祿4年(973年)に焼失し、一部は再建されたとしているが、今回の調査部分での再建は行なわれなかったものと考えられる。これは後述の遺物の状況からも明らかである。今回の調査は、遺構の保存状況がよく、僧房の平面をはじめ、床などの施設の状況まで明らかにすることができた。また大房と小子房の間に付属屋があることが確認され奈良時代の僧房の研究に多くの新しい資料を得ることができた。

食堂 食堂は昭和45年の調査で位置・基壇規模(東西46.8m×南北21.7m)正面階段及び基壇周囲の状況が明らかになっている。今回の調査は食堂西端を発掘し、北面と西面の基壇地覆

第13図 薬師寺西僧房発掘調査遺構図

石、玉石敷きの犬走りと雨落溝及び建物の西側柱列を検出した。基壇上面は削平されていたが、西北隅には根石を、西側中央とその南の推定柱位置には礎石下地業と考えられる砂質土の地固めを検出した。これによって食堂の梁行は、身舎2間15尺等間、庇12尺と推定することができる。食堂西面南寄りの犬走り部分では石敷きの痕跡が見られず、また僧房前庇に面する位置でもあり、ここに階段の存在が考えられる。

鐘楼 鐘楼跡の調査は今回がはじめてであるが、これと対称位置の経楼についてはすでに調査が行なわれ、基壇規模や階段位置などが確認されている。鐘楼は経楼と正しく対称の位置に検出された。基壇上面はかなり削平されており、礎石据え付けの痕跡などは失なわれ、柱位置は不明である。基壇化甃石はほとんど抜き取られていたが、北面と西面に凝灰岩製石階を残し、北面石階部には地覆石が一部遺存していた。しかし北面では、石階部以外の抜き取り溝は幅がせまく地覆石を略し、直接羽目石を立てていた可能性が高い。北面石階は幅3.3m、出約0.9mで、西面階段は幅4.1m出が約1mである。これによると基壇規模は東西15.8m、南北19.5mに復原され、経楼基壇と全く同規模であることが確認された。したがって『縁起』に見える鐘楼とくらべると、周囲の基壇の出は4mを越えることとなり、かなり軒の出の深い構造を考え

黒色土器(1・2) 土師器(3~5) 灰釉陶器(8~10) 緑釉陶器(11~12) 青磁(7~13) 白磁(6)

第14図 薬師寺西僧房跡出土の土器

ねばならない。

本坊北方地区の調査 現在の本坊の北約25mのところに幅3m、長さ30mの東西トレンチを2本設定した。

東トレンチ 検出したおもな遺構は土壇4と溝1である。土壇からは平安初期の軒瓦を含む多量の瓦片が投棄された状態で出土した。溝は南北方向で、その東肩を検出した。溝埋土には瓦器が含まれるが、西肩及び溝底は確認できなかった。

西トレンチ トレンチ東半で瓦器を含む中世の土壇2及びピット9を検出した。ピットはほぼ東西に並ぶが、建物や柵などのまともなつかめず性格は不明である。もっとも東のピットから「薬師寺東院」銘の軒平瓦と灯明皿が出土している。トレンチ西半では近世以降の土壇、井戸、石列を検出した。土壇から灯明皿、近世の軒平瓦が出土した。井戸は径1.5mほどで、下半を玉石で円形に積み、上半を丸太で方形に組み、上に厚板で蓋をしている。石列は南北方向で、井戸東側の土留めと思われる。

この地区は『薬師寺縁起』引用の『流記』の記載によって、倉垣院などに比定する考えもあるが、今回の調査では明確に奈良時代にさかのぼる遺構は確認できなかった。ただ、東トレンチ西端の南北溝については、これが奈良時代にさかのぼるとすれば、寺域内における条坊関係の遺構になる可能性がある。また江戸時代の絵図面によればこの付近は子院跡で西トレンチ発見の諸遺構がそれにあたるかもしれない。

なお、西回廊は後世の破壊が著しく、基壇土の一部を検出したにとどまった。

遺物 西僧房跡からは瓦、土器、金属製品、ガラス製品、石製品など多様な遺物を発見した。これらはすべて天祿4年(973年)の火災で埋没したものである。

瓦類 瓦類は僧房基壇上及びその周辺に広がる焼土中から大量に出土した。軒瓦でみると本薬師寺所用瓦と同形の軒丸瓦6276A・Bが全体の約20%、軒平瓦6641G・H型式が約60%を占めている。また僧房の南側の瓦溜りからは、従来本薬師寺でも例の少ない6121型式が瓦当部完形で出土したのをはじめとして瓦が大量に出土した。なおその中に開元通宝を押した平瓦がある。この平瓦は桶巻作りによって作られた可能性が認められる。平城宮式と酷似する瓦当文様で、薬師寺のほかは出土していない。軒丸瓦6304E型式及び軒平瓦6664O型式のものもかなりあり、奈良前期の瓦とともに平城移建時の屋根に用いられた。平安時代のものは巴文を含めて多くの種類が出土した。その中に従来、天祿火災後の再建に関連する瓦として平安中期ごろに考えられていた「擬古作」の瓦もあるが、僧房の間仕切りの補修に使われており、少なくとも天祿火災以前にさかのぼることが明らかになった。

土器類 僧房の床面から土師器・須恵器・黒色土器・灰釉陶器・鉛釉陶器・中国製磁器が出土した。このうち大多数を占めるのは土師器、黒色土器の碗・皿類で、これに少量の灰釉陶器、碗、皿が加わって日用什器を構成している。これらに対して数は少ないが、三彩多嘴壺、二彩鉄鉢、緑釉香炉、唾壺、碗、皿、灰釉多嘴壺などの仏器がある。このうち三彩多嘴壺、二彩鉄鉢は明らかに奈良時代の製作になるもので、約200年間の伝世が知られる。また緑釉唾壺は口縁部の欠損後、縁を平らに磨いており、用途をかえての使用がうかがわれる。青磁には貼花文水注と碗がある。碗には口縁部を切り込んで輪花としたものもある。水注は湖南省瓦渣坪窯の製品であり、日本での出土は稀例に属する。白磁は碗で、ほぼ完形のものである。中国製磁器はいずれも唐末～五代の製品である。

金属製品 金属製品のうち最も注目されるものは小金銅仏断片である。火熱で変形・破損が著しいが、反花、諸花を重ねた台座と兩脚下部及び衣の一部を残している。像高を復原すれば30cm前後になろう。これに近接して厨子の一部と思われる金銅板も出土している。そのほか数多くの鉄釘が出土し、鉄製戸口金具や銅製かんぬきなど建物に関係するものも多い。以上のほかに、ガラス製小玉、砥石が発見されている。これらの遺物は房の前室・中室の東寄りの部分に集中して発見され、なかには棚から転落したような状況を示すものもあった。

今回の出土遺物は絶対年代を知り得る良好な資料であるとともに、僧房における生活様式を具体的につかむ手がかりとなる点で大きな意味をもつものである。

大安寺鐘樓・僧房の調査 大安寺小学校の校舎増築の現状変更に伴い奈良市の依頼で発掘調査したものである。発掘地は大安寺鐘樓および僧房にあたる。鐘樓については昭和38・41年に一部調査されているが(奈良国立文化財研究所年報 1964・67参照)、今回は鐘樓北面から僧房東側柱列にかけて発掘し、鐘樓と軒廊との関連などが一層明らかになった。

第15図 大安寺鐘樓地区発掘調査遺構図

鐘樓 遺構は浅いところでは現校庭面から約20cm下で検出された。基壇上面はかなり削平されていたが、北側柱列にあたる根石群3箇所を検出した。梁間は7.4m（天平尺25尺）あり、『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』記載の「長三丈八尺，廣二丈五尺」とよく一致する。基壇化粧は凝灰岩製で，地覆石の一部が西北隅と北面に残る。北面中央部には地覆を据えた痕跡はみられず，繋廊に直接つながっている。鐘樓北側柱心から北面地覆石，西側柱心から西面地覆ラインまでの距離はいずれも3.7mあり，基壇は東西14.8mに復原できる。西面では西北地覆ラインの外方に延石の抜き取り溝を発見した。現在西北隅地覆石はこの抜き取り溝の埋土の上に据えられている。

繋廊 鐘樓と講堂西軒廊をむすぶもので，先年の調査で根石が発見されていた。今回の調査では，繋廊南妻の根石が鐘樓北面地覆石にはほぼ接し，妻心から鐘樓北側柱心までは約4m（13.5尺），梁間約3.6m（12尺），桁行約2.7m（9尺）で北へ延びていることが判明し，鐘樓とのとりつき状況が一層明確となった。梁間約3.6m（12尺）は『資財帳』の「長各二丈七尺，廣一丈四尺」に比べると2尺狭い。しかし，長さは仮に9尺3間とすると2丈7尺となって一致する。今回検出の根石は同一位置で上下2層に重なっている。鐘樓北面地覆石には繋廊羽目石のかかる欠きこみがあり，繋廊の東西両側に延石抜き取り溝も検出された。

僧房 『資財帳』にみえる「西太房北列」の東側柱筋に相当する根石群2箇所を検出した柱間は3.9m（13尺）である。基壇の発掘区北半には幅2.5mの中世溝が東西方向にあり，北へ折れて延びている。さらに基壇東面には近世の南北溝が掘られ，基壇前面の状況や雨落溝は明らかでない。また，この僧房と鐘樓の間には凝灰岩の石敷の痕跡が検出された。凝灰岩細片は厚いところでは約4cm残っているが風化が著しく目地やもとの広がりなどは不明である。

遺物 瓦が多数を占め，土器は少量である。瓦の大部分は，僧房・鐘樓のほぼ中間にある北土壇（東西約7m×南北3.5m）から集中して出土した。軒丸瓦6138型式，軒平瓦6712型式が最も多く出土した。土器は，鐘樓西側の延石抜き取り溝の埋土から10世紀頃の特徴をもつ土器器・黒色土器・灰釉陶器の破片が出土し，鐘樓とその周辺の改修の年代の上限がおさえられる。

（宮本長二郎・川越俊一・高瀬要一）